

社会的貢献感がワークモチベーションに及ぼす影響 の研究：定型業務を対象にして

有吉, 美恵

<https://hdl.handle.net/2324/2236007>

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	有吉美恵			
論文名	社会的貢献感がワークモチベーションに及ぼす影響の研究 —定型業務を対象にして—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	山口裕幸
	副査	九州大学	教授	中村知靖
	副査	九州大学	准教授	池田浩
	副査	九州大学	准教授	岡幸江

論文審査の結果の要旨

本研究は、倦怠感に陥りがちな定型業務に対するワークモチベーションを向上させる組織マネジメントのあり方を検討するうえで、他者から感謝されたり評価されたりすることで生まれる社会的貢献感の影響に着目し、組織現場におけるアクションリサーチと質問紙調査に基づくデータ分析を組み合わせて、職務特性の認知からマネジメントによる働きかけの影響を受けてワークモチベーションの高まりにつながる統合的なモデルの妥当性を実証的に検討したものである。現場の観察やインタビュー、質問紙調査を通して、定型業務従事者は、自らの職務の意義を低く評価し、ワークモチベーションが低いことを明らかにした。そのうえで、定型業務の度合いが高いことがワークモチベーションを抑制する関係につながるには、顧客と社会への貢献、自己の成長、達成感が重要な影響を及ぼしていることを明らかにした。そして、組織現場の管理職の協力を得た現場介入研究によって、上司のポジティブフィードバックが定型業務に取り組む部下のワークモチベーションを高めるには、社会的貢献感を得ることが重要な役割を果たすことを明らかにした。また、上司からのポジティブフィードバックは、顧客と社会への貢献感と所属組織への貢献感を得ることにつながり、ワークモチベーションの高まりをもたらす関係にあることも明らかにした。これらの実証研究結果に基づき、ワークモチベーションの変動をもたらす組織マネジメントの特性を考察し、実践的な組織マネジメントのあり方について提言を行っている。

本研究は、組織現場のリアリティに基づく問題意識を基盤に、ワークモチベーション研究において見逃されてきた側面に光を当て、社会的貢献感が果たす機能について実証的検討を行い、貴重な知見をもたらすものである。これらの研究の成果は、学術誌に掲載され、学会でも注目を集めるとともに、新聞でも取り上げられた。組織心理学としての学術的価値の高さのみならず、働き方改革を推進する上で直面する現実問題の解決に関する有益な実践的提言につながるものとしても評価できる。よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。